

平成 21 年 3 月 24 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006-2008

課題番号：18520590

研究課題名（和文） 東アジア的視点から見た東日本須恵器生産の特質

研究課題名（英文） Characteristic of East Japan Sue Pottery production seen from the east Asian aspect.

研究代表者

酒井 清治(SAKAI KIYOJI)

駒澤大学・文学部・教授

研究者番号：80296821

研究成果の概要：東日本古墳時代最大級の須恵器生産地であった群馬県太田市金山丘陵窯跡群の報告書刊行と、須恵器の特色から歴史的背景の検討を行った。金山丘陵窯跡群須恵器の特色を抽出して「北関東型須恵器」とし、その分布と、編年を作成した。群馬の首長層が畿内から須恵器を導入し、生産を継続したため「北関東型須恵器」という地域色が生まれ、首長層が周辺各地へ技術移植を行ったことにより関東・東北まで広がっていったと考えられる。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	1,300,000	0	1,300,000
2007 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	570,000	3,770,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：アジア考古学 古墳時代 群馬 須恵器生産 金山丘陵窯跡群 北関東型須恵器

1. 研究開始当初の背景

関東の古墳時代の須恵器研究は近年停滞している。その原因は須恵器生産地の研究が進んでいないことが原因である。現在、群馬県内では膨大な県内在地産須恵器が出土しているにも関わらず、金山窯跡群をはじめ在地産の製品については限られた資料から類推しているのが現状である。この現状を打破し、新たに関東の須恵器生産を古墳時代東国の手工業生産技術導入の一環として位置づけ従前の畿内 地方の視点だけでなく東アジア的な広い視点で捉え直して解明しようと考えた。

2. 研究の目的

本研究では以下の2つを研究の柱とした。
(1) 駒澤大学では1965年から1977年にかけて、「東日本における古代手工業生産の解明」というテーマで群馬県太田市金山窯跡群の発掘を行ってきた。すでに概要報告を公刊しているが本報告は未刊である。この窯跡群は東国屈指の窯跡群で、当時関東で強大な勢力を誇った上毛野君氏がそれに準ずる首長層が生産に関与した可能性が想定できる。この窯跡群を整理調査し、金山窯跡群の全貌を明らかにするため資料提示を行うとともに、理化学的・鉱物学的胎土分析により需給関係を検討し、金山窯跡群の生産を通して関東へ手

工業生産がどのように導入されていったのか、その背景を探る。これを一つめの柱とした。

(2)、近年関東の渡来人の存在が考古学的に明らかになってきているが、その目的は東国への技術導入が想定されている。関東の在産須恵器の中には高坏の交互透し、大甕の補強帯、提瓶の絞り技法など朝鮮半島起源の技法が存在していることから、関東の須恵器生産に渡来人が関わったことが推定でき、関東の須恵器と朝鮮半島の陶質土器との技術的検討を広域的な視点で捉え直し、渡来人による関東への手工業生産技術導入のあり方を探ることを目的とする。これを二つめの柱とした。

このような目的を持って、東日本で最大級の群馬金山窯跡群の実態を明らかにし、その生産体制と生産品である須恵器の流通を明らかにすることをおこなった。

3. 研究の方法

(1) まず、駒澤大学が発掘調査した窯跡群、古墳群の整理作業を行い、そこから関東の須恵器生産体制、歴史的背景を考えようとした。

駒澤大学が昭和41年から44年にかけて発掘調査してきた辻小屋窯跡群、八幡窯跡群、入宿遺跡、昭和43年から52年にかけて調査した菅ノ沢遺跡、昭和52・53年の巖穴山古墳の整理調査を行った。古墳時代の須恵器窯跡群が主体で、関連する古墳群である。

(2) 出土須恵器の実測・写真などの基礎的データ作業を進め、金山丘陵窯跡群の須恵器の特徴を明らかにしようと努めた。金山丘陵窯跡群の須恵器には酒井が「北関東型須恵器」と呼称した特徴をさらに明確にするためである。

(3) 窯跡についても図化した。菅ノ沢窯跡では操業した窯が7基、未操業の窯が6基であった。未操業の窯が見つかったことにより、どのように窯を築窯したのか検討する。この地域の地盤である金山流紋岩類に掘り抜き式で窯を築いたようで、固い岩盤に当たり、また、岩盤の上に堆積した危弱な層に築窯したため失敗したことが分かったが、このことを比較資料として周辺の窯跡群を検討することとした。

(4) さらに古墳群や巖穴山古墳を整理し、須恵器生産とどのように関わるのか考えるための資料化を行った。その後、須恵器・窯跡のデータをもとに、金山丘陵窯跡群古墳時代須恵器生産の実態を明らかにし、須恵器生産の背景、流通、さらには編年ための年代観を明らかにしていく。

(5) 金山丘陵窯跡群の特色を、須恵器の蛍光X線回析試験と科学分析により胎土の特色について検討する。

4. 研究成果

(1) 菅ノ沢窯跡群の操業順序について、灰層の前後関係を考えていった。この窯跡群出土の須恵器を叩き具や当て具から検討すると、切り合い関係の前後の窯から出土することが判明した。すなわち木製の製作工具が摩滅しない間、操業が継続したことが判明した。このことは、近接し並列するように構築した窯が、長い間に構築されたのではなく、短い期間に続けて操業したことが判明し、須恵器を継続して供給する体制であった。

(2) 須恵器の年代についてまず畿内の須恵器編年の再検討を行った。特に問題となるMT15型式について検討した。韓国の漢城百濟から出土するTK23型式を470年頃を下限年代とし、榛名山二ツ岳火山灰FAの降下年代を5世紀末とする研究成果を援用し、その火山灰の下から出土するMT15型式の出現を480年頃とした。また、531年崩御の継体陵と想定されている今城塚古墳出土の須恵器をTK10型式古段階とし、藤ノ木古墳の須恵器をTK10型式新段階と設定した。それに続くTK85型式、TK43型式を一つの型式としてTK43型式とし、その前半をMT85号窯跡群の資料をおいた。それにより菅ノ沢窯跡の須恵器はTK43型式のTK43号窯並行と考えた。さらに菅ノ沢窯跡が切り込んでいる土層を榛名山二ツ岳の火山灰FPと考え、陶器TK43型式並行の570年以前から580年代を操業時期と考えた。

(3) 金山の窯構造は巨視的に見るならば、直立気味の奥壁を持つ掘り抜き構造の窰に統一されており、後に関東で受容する排煙調整溝付窰構造を採用しない保守的、伝統的な須恵器生産窰であった。

金山丘陵窯跡群と同様な補強帯を持つ大甕を焼成した埼玉県寄居町末野3号窯跡と比較すると、形態や前庭部、前庭部排水溝が共通しており、両窯跡群の関係が深いことが判明した。

末野3号窯跡の底部穿孔土器は埼玉古墳群中の山古墳へ供給されていることから、群馬の技術系譜の須恵器の供給から、埼玉古墳群と群馬の関係が深く、そのため北関東型須恵器の供給、技術伝播があったのであろう。

(4) 北関東型須恵器の特色は、坏蓋の「八」の字状口縁や手持ちヘラ削り、天井部の稜あるいは沈線が遅くまで残存する。高坏の脚端部が外へ開き、古い様相の四方透しが後まで残る、無蓋高坏の坏部が深い例、長脚一段と二方透しなどの省略化、新しい時期の二段透しの残存などの多様化がある。ハソウは胴部上位明瞭な突線、口縁の多様化、樽型ハソウの残存。提瓶は絞り閉塞技法、環状把手の存

続や大型化、平底の徳利形壺の存在、大甕の頸部補強帯や口唇部と口縁内面の波状文の存在、大甕の格子叩き、内面「の」の字の当て目などである。

この北関東型須恵器は群馬、埼玉だけでなく、関東全域に広がり、さらには長野、東北地方からも出土することが確認されるようになった。この広がりには6世紀に関東で各地に活甕に見られる、埴輪や古墳石材が河川によって供給される広域地域間交流と関連して、須恵器も同じ広がりを示したようである。また、北関東型須恵器は製品の供給だけでなく、技術伝播が行われたことが特色で、群馬からの広がりである。このことは群馬の首長層の周辺首長層への技術供与と考えられる。それが福島・宮城へ広がったのは畿内の東北経営に関わった群馬の首長層の動静と関わりがあると想定できる。

群馬の須恵器生産は、5世紀から6世紀初頭にかけて他地域から技術導入したが、その中から定着し、在地化した独自の形態を生み出したが、継続的生産であったために古い様相が存続したようである。また、「八」の字状口縁部の坏蓋は土師器の関わりの中で生産されたようであるが、それは須恵器生産が継続した群馬でも土師器中心の地域であったことが原因である。

(5) 菅ノ沢古墳群と窯跡群の関連について検討したが、径22mのL-95号墳が7世紀前半に築造され、その後墳丘を持たない小石室の終末期群集墳が築造されたが、最終末は7世紀末ないし8世紀以降と推定される。また、終末期古墳の終焉は火葬墓との関連も想定されており、東毛の古墳終焉の様相が明らかになった。窯跡との関連については、窯操業後の空地に古墳群を築造したようで、窯操業集団とは関連はないようである。

(6) 菅ノ沢窯跡群に近接する巖穴山古墳は、東毛唯一の大型方墳で、墳丘基底が一边36.5mで、全長11.7mの副室構造の横穴式石室である。巖穴山古墳は周辺の6世紀末から7世紀初頭の最終末前方後円墳である今泉口八幡山古墳、割地山古墳、二ツ山1号墳の構造的な特徴・石室構築技術を取り入れたのが巖穴山古墳であると考えられる。すなわち前方後円墳消滅ののちに、各地の勢力を統合する形で方墳の巖穴山古墳が成立したと推定されることは、横穴式石室が各地の首長墓をの諸要素を結集した構造になっていることから窺える。

巖穴山古墳の年代は7世紀中葉との考え方もあるが、刀装具や須恵器の年代から7世紀前半と考えられる。出土須恵器は胎土や特徴から金山丘陵産の可能性が高いが、近接する菅ノ沢窯跡は6世紀末でほぼ終焉する。菅

ノ沢窯跡にも平瓶のように7世紀に下る資料が出土することから、巖穴山古墳は金山窯跡群のいずれかの支群の操業と関連している可能性がある。

(7) 金山丘陵窯跡群の須恵器の特色は多いが、その中でも提瓶の閉塞技法である絞り技法は注目できる。八幡、菅ノ沢窯跡群、入宿遺跡から提瓶の絞り技法が出土するが、粘土細積み上げ整形で、器厚は厚い。閉塞方法は閉塞部分を粘土紐で円錐形にしたのち、回転を使わず粘土を周りから寄せながら穴を塞ぐことにより、内面に絞りが出来る。北野博司氏は閉塞する行為を「絞りきる」と用いた。金山丘陵窯跡群の提瓶は絞り目が放射状になっており、回転して絞っていないようで、「絞り技法」として大きく括り、その中に回転を利用したものと利用しない絞りがあったようである。

古墳時代の樽形ハソウ、提瓶、横瓶などは器形を作るために閉塞するのであり、閉塞は軸を変える目的で行う製作の一工程である。樽形ハソウ、提瓶、横瓶を風船技法に加える見解があるが、風船技法が加圧変形を目的とするならば、これらの器形は風船技法と何ら関わりがない形態である。おそらく笹沢正史氏が述べるように、閉塞する意図は中空にしておき、器形のヘタリや高台貼り付けなどによる変形を防ぎ、胴部を密着させて次の作業を順調に行えることを目的としており、変形を意図したものは少なかったと考えられる。

絞り技法の系譜は中国仰韶文化半坡類型前期の尖底瓶や、龍山文化の高および高形袋状の三足を持つ器形に見られる。その後の前漢の蚕形壺や南北朝の虎子も絞り技法を用いる。朝鮮半島においては加耶・新羅の4世紀から5世紀の陶質土器大甕底部が絞り技法で製作され、百済にも存在することが判明している。大甕以外に6世紀の中甕、提瓶にも絞り技法は見つかっている。日本へは須恵器の伝播とともに伝えられ、堺市大庭寺窯跡大甕底部に存在する。しかし、この大甕の絞り技法はすぐに消滅し、底部から順次口縁の方へ積み上げて製作する方法に変化する。

同様な絞り技法は提瓶や平瓶にある。提瓶の絞り技法の出現は大阪・小阪遺跡が最も早いと考えられる。その分布は大阪・石川・群馬に広がる。平瓶は大阪・石川・岡山・大分に広がる。しかし、提瓶・平瓶ともに円盤閉塞が基本であり、絞り閉塞は客体的といえよう。しかし、金山丘陵窯跡群では絞り技法は主体的な技法であり、特色といえよう。

韓国・日本の大甕底部の絞り技法は、東アジアの土器作り技術が根底にあったようである。しかし、日本に伝わったのち廃れてしまったようにも見えるが、絞り閉塞をする提瓶・横瓶が作られていることから、潜在的に

閉塞技法が存在し、金山丘陵窯跡群の提瓶も須恵器工人が潜在的に保持していた技術が表に現れたと考えられる。

(8) 金山丘陵窯跡群の須恵器には、絞り閉塞技法だけでなく、高坏脚部の交互透かしなど朝鮮半島と類似するものがある。このような例は渡来人の存在と関わる可能性も捨てきれない。

特に5世紀後半の土器をみると東国では渡来人が伝えた朝鮮半島系土器はすぐに渡来系の技術を捨て去ったことにより、在地化していく傾向が畿内よりも色濃く見える。また竈の導入も新興集落に早く導入されるようである。また陸奥においては渡来人は東山道ルートで拠点を作りながら入り、鉄器生産の技術や竈・甔などをもって伝えたため東北にその技術が伝播した。渡来人は東国へ為政者の意図のもと送り込まれ、その結果各地に様々な技術や生活様式が定着して広まっていったのであろう。

(9) まとめとして、金山窯跡群は群馬の高崎・藤岡などの諸窯とともに、首長層により導入されて各地に技術移植された窯跡群で、須恵器は県内各地の古墳を中心に供給された。関東各地、東北地方までその技術は広がっていったが、その背景には群馬の首長層と畿内との関係があったと考えられる。

(10) 須恵器の蛍光 X 線回析試験と科学分析によれば、粘土の取り方と砂の混合比により26タイプに分類されるという。しかし、基本的な粘土の構成の主流は2タイプに分かれ、その後の処理が異なるために分散したと推測されている。

(11) 本研究は、関東に所在する須恵器窯跡群を一地方の窯跡としてみるのではなく、畿内あるいは朝鮮半島との関連を視野に見ようと試みた研究である。技術的な面でその根底には連綿と続く技術系譜があると思われるが、群馬という古墳時代に大きな勢力があった地域で、技術が継続した場合、畿内と異なる発達の仕方をするようである。すなわち地域色が見られるものの、須恵器の変遷は畿内から遅れるものの、同様な変遷をたどっているようである。

このことは、古墳時代の他の技術、例えば埴輪、石製品、鉄器など様々な技術移植とその発展、各地への伝播が、畿内と同じように群馬でも行われたようで、群馬のような巨大首長層の勢力範囲での技術保持とその地域あるいは周辺地域への移植や各地首長層との関係が想定できた。このことは須恵器に限らずそれぞれの技術にも同様のことが想定でき、今後このような視点で古墳時代の技術

移植、技術継承、伝播を見ていく場合の視点の一つとなろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

(1) [雑誌論文](計3件)

酒井清治 「古墳出土の土器の特質」『季刊考古学 106』査読無 雄山閣 2009 pp.42-47

酒井清治 「武・相の渡来文化 - 陶質土器をめぐって - 」『季刊考古学別冊 15』査読無 雄山閣 2007 pp.84-89

酒井清治 「須恵器の編年と年代観」『日韓古墳時代の年代観』歴博国際研究集会 査読無 国立歴史民俗博物館 2006

(2) [学会発表](計1件)

酒井清治 「陶質土器と須恵器」東北学院大学国際シンポジウム 百済と倭国を考える 2007.10.26 東北学院大学

(3) [図書](計4件)

酒井清治(共著)駒澤大学考古学研究室『群馬・金山丘陵窯跡群』2009 340頁

酒井清治(共著)高志書房『倭国と百済』2008 pp.137-158

酒井清治(共著)同成社『生産の考古学』2008 pp.149-167

酒井清治(共著)駒澤大学考古学研究室『群馬・金山丘陵窯跡群』2007 148頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

酒井 清治(SAKAI KIYOJI)
駒澤大学・文学部・教授
研究者番号：80296821

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者